

説教 「互いに愛し合いなさい」

(レビ記 19 章 9-18 節 ヨハネによる福音書 13 章 31-35 節)

2022 年 5 月 8 日日本基督教団仙川教会
大串肇牧師

今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。

(ヨハネ 13:31)

皆さん、ヨハネ 13 章は最後の晩餐の時、イエスが弟子たちの足を洗い、新しい教えが語られた箇所です。人の子とはイエスを指しますが、メシヤといてもいいでしょう。神の救いをもたらす救い主としてこの世に遣わされました。人の子であるイエスこそ、神の「栄光」を表すために来たことがヨハネ福音書の冒頭から語られました。そして今、イエスは十字架におつきになり、死んで復活するのです。ところが、その受難と十字架の時すでに、神の栄光はもたらされたと主張するところにヨハネ福音書の独特のメッセージがあります。ですから、「**神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる**」(32 節) のです。

十字架は最後ではありません。神がわたくしたちに下さる御救いの完成なのです。わたしたちの常識からいえば、どんな偉い人物でも死んでしまえば終わりです。ところがヨハネ福音書は終わりではなく、完成の時であり、神の栄光がもたらされたというのです。それはいったいどういう意味なのでしょう。

子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。(33 節)

ここでは弟子たちをイエスはご自身の「子」とお呼びになっています。この箇所が唯一の箇所であり、大変ユニークです。父なる神と子たるイエスとの関係に、あたかもイエスとわたしたちが加えられる。神との交わりの中に入れられることを意味します。わたしたちも神の「子」と呼ばれるのは、イエスが十字架を通して私たちと神との間の壁を取り払って下さるからです。それはわたしたちの「罪」の問題です。イエスはまさに罪と滅び、死と対決するために十字架におつきになり、そして勝利されました。これはわたしたちがすぐれているからでもあ

りません。信仰が深かったからでもなく、ただ神がわたしたちを憐れんで、愛して下さったからです。そこでイエスは弟子たちにこう述べました。

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。(34 節)

「掟」という言葉は大変重い言葉です。しかも「たがいに愛し合いなさい」という掟は目新しい言葉ではありません。旧約聖書にも隣人を愛することが求められています。単純なようですが、これを実践することはとても困難です。「愛する」とは口で言うだけでは簡単です。この最後の説教を終えるとユダはイエスを裏切り、ペトロはイエスを知らないと言った出来事が続いています。裏切りと拒否、そして死を通してイエスの愛は貫徹されるのです。

イエスが自分の命を捨ててまでもわたしたちを愛して下さった。そこに真実の愛が指示されています。しかし、わたしたちは他者のために犠牲になる、あるいは自分の命を軽々と捨てることが求められているわけではありません。イエスはわたしたちが「生きる」ために自分を犠牲として捧げたのは、わたしたちが生きるためです。わたしたちが愛するのは、死んで滅びるためではなく、わたしたちもまたイエスの愛に生きるためなのです。他者を憎み、争い、傷つけあっている生き方には希望がありません。行き詰ります。しかしイエスの愛を心から受け入れるならば、わたしたちもまたイエスの愛に生きる希望があるのです。争いや不破、様々な差別や偏見に打ち勝ち、わたしたちは神の子とされ、イエスの弟子となることが出来るのです。こうしてエスは結んでいます。

互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。(35 節)

教会がこの世にある意味とは、わたしたちもまたイエスの弟子であることを証しすることではないでしょうか。「互いに愛し合うこと」。どんなときでもイエスがわたしたちに示した愛を思い起こし、立ち帰るときに、わたしたちはイエスのものとなる、神の子として一つの愛の共同体になることが出来るのです。この約束と希望の下でわたしたちは信仰を証ししてまいりたいと願います。お祈りしましょう。